

早稲田大学フェンシング部におけるスポーツビジョンの研究
The research on the sports vision of Waseda university fencing club
1K03A200-0 増田 誠治
主査 太田 章 先生 副査 葛西 順一 先生

【緒言】

スポーツビジョンとはスポーツをする際に必要な視覚能力のことである。スポーツを行う状況というのは、自分や敵、ボールや用具などすべてが動いている特殊な状況が多く、日常生活の状況とは違うので、視覚能力も単純に見るという行為だけでなく、動いているものを見たり、視線を素早く切り替えたり、視野を広くもったり、瞬間的にものを見たりする能力が必要になってくる。

視覚能力は外界にある約 80%の情報を収集する感覚機能であり、スポーツにおいても、パフォーマンスをするに当たっての基礎機能であり、重要な機能である。

フェンシングでは素早く動く剣を正確に捉えたり、動きの中で変化する相手との距離を適切に保つためにスポーツビジョンが重要な役割を果たしていると考えられる。

本研究ではフェンシングにおけるスポーツビジョンの役割とスポーツビジョン能力に影響を与える要因を調べるため、フェンシング部の部員を対象にスポーツビジョンの測定を行い、男女別、経験年数別、種目別、競技レベル別に比較した。

【方法】

被験者は早稲田大学フェンシング部に所属する男子 14 名と女子 6 名の計 20 名である。内訳は選手 19 名とトレーナー 1 名で、フェンシング未経験者代表として参考にするためトレーナーを含んだ。測定はアシックス社がスポーツビジョンの第一人者である石垣尚男監修のもとで作った SPEESION というソフトを用い、動体視力、眼球運動、周辺視野、瞬間視の 4 つのスポーツビジョンを測定した。

また、同時に行ったアンケートでは、静止視力、フェンシングの経験年数、フェンシングの専門種目、フェンシングの最高成績(個人戦)、その他のスポーツ経験について回答してもらった。

【結果】

測定結果では周辺視野と眼球運動の能力において、部員の 9 割が標準以上、6 割が競技者レベルの能力を有しているという結果になった。瞬間視においては、8 割が標準以上、4 割が競技者レベルの能力を有しているという結果になった。動体視力においては、4 割が標準、4 割が一般平均より低めという結果になった。

男女別で比較すると、周辺視野においてはほとんど能力の差は見られなかった。しかし、動体視力、眼球運動、瞬間視の 3 項目ではいずれも男子の方が女子を上回る結果となった。

経験年数で比較すると、経験年数が長ければスポーツビジョン能力も高いという結果にはならなかった。

種目別で比較すると、瞬間視ではほとんど差が見られなかった。しかし、動体視力と周辺視野では差が生じた。4 つの項目において、サーブルが高い能力を有しているという結果になった。

競技レベルで比較すると、競技レベルが高い者はスポーツビジョン能力も優れているという結果にはならなかった。

【考察】

男女別で比較をすると男子の方が良い結果であった。それは、動いているものを見るため運動能力や運動センスなどが影響していると考えた。一般的には男子の方が女子より運動能力や運動センスが高いと言われているからである。

先行研究では、スポーツビジョンにおいて男女差はほとんど見られないとされている。ただ、動体視力と眼と手の協応動作ではわずかが男子の方が女子を上回る結果となり、測定する機器に対する男女の体格の違いが能力値に影響を与えたと考えられている。

経験年数、種目別、競技レベルで比較したが、大きな差は見られなかった。これらはスポーツビジョンに影響を与える要因にはならないと考えられる。

【結論】

フェンシングにおけるスポーツビジョンの役割は、様々な局面において剣の動きと相手との距離を見る、相手の動作をいち早く察知する、相手の有効面を的確に突くといった行為に直結しており、重要なものだとわかった。

フェンシングにおいては男女の性差、経験年数、種目、競技レベルはいずれもスポーツビジョン能力に影響を与える要因にはなりえないことがわかった。スポーツビジョン能力に影響を与える要因を明らかにすることが残された課題である。